

民衆史の遺産：その中の一巻、「何が書いてあるのだろう なんだか馬鹿々々しい題名だな」と思いつつ読み始め、「キツネ 狐憑き」の話が度々出てくる、これは面白いと続けた。「つき」という言葉は様々な言い方があるそうだ。「運が尽きる」「今夜はついている」「死神が憑いている」と言葉はあるがまずは、憑きの話。

「キツネに騙された」と大笑いしつつも真剣に話す人。歩いていたが何度も同じところを通る、いい加減に疲れてきたが目的地に着かない、「おかしいな よく知っている通り 私はすぐそのなじみの店に行きたいだけなんで着かないの どこを歩いているの なんでこんなところに来ているの」歩きながら、なにやら気配を感じて原因がわかった、「キツネだ 狐が悪さを している」と思い当たり、「こらあ キツネ 悪さをするな」怒声を発すれば気配がピタリやんで、キャツが走り去る様子、悪さをするキツネがいなくなると、すなおにまっすぐ帰れた。行きつ、戻りつ、冷や汗をかいた様子、なんだか誰かが傍にいるような気がして、キツネとわかって本当に腹が立って、「あんな奴に 化かされて たまるか」と一生懸命に話すことの可笑しさ。

酒井貴広：「憑きもの」とは極端に表現すれば、多様な存在による憑依現象を柱とする民俗文化である。憑依現象は世界各地で見られる現象であり、これに対する意味付けや語りにも、各地域の特徴のみならず、地域を越えた多くの共通点を見出すことができる。

日本における「憑きもの」には、野に居る動物や靈魂、人間の生霊、精霊や神が突発的に憑依する。もう一つは特定の家筋が動物霊等を使役しているとする、この二つに大別できる。狐の出雲地方・犬神の高知県・犬神、蛇神の大部分が知られている。出雲地方の狐持ちは、権力財力を持っている家系のものが多く、妬みからの差別という甘い話だけれど、その他の地方の狐憑きや犬神は悲惨なおいがする。

読み始めた当初は、たかが狐憑き、たかが迷信と興味半分に軽い気持ちで読み始めたが、その貧困と差別は、穢多、非人に対する差別と同じだと深刻に思い始めた。とはいえ、このような差別があったのは50年前までで、現在は笑い話であることを願う。

毎日新聞；昭和35年：大阪府で18歳になる娘が妙なことを口走り始めた。家人が祈祷師に相談したところ、「それは狐が憑いているからだ」娘の家で600束の線香を焚き、祈祷し、手足を縛って叩き引きずり回した結果、娘は死んでしまった。

毎日新聞：鳥取県の男女が恋愛をして結婚をしたが、一方の家が、「狐もち」の家系とわかり親が子を絶縁してしまった。子はたまりかね、法務局に人権擁護で訴えた。その後法務局の努力で、親子夫婦も円満に解決した。

速水保孝著<出雲の迷信>

◎私は狐持ちの家に生まれた。だから、どうしても、この本を書かずにはおられない。<略>狐持ち迷信といえども、歴史的な産物である。<略>私たち狐持ちはこの迷信の被害者である、忌まわしい迷信打破を図らなければならない。

◎私たち狐もちの家に生まれたものが、出雲地方の普通も家系から嫁をもらうことは、一昔前では、ほとんどできない相談であった。出雲では我が党の数が全戸数の一割近くもあるのだから、結婚候補者の絶対数にはこと欠かないはずである。ところが、郡内きっての大地主の家に生まれたものにとって、相手になる家が、同じ狐持ちの大財産家からということになる。

◎私たちの結婚で、父と祖母が家系の純潔を守るということで結婚に反対した。一時、親戚縁者とは絶縁関係になったが、父や祖母がそれぞれおれ、間もなく修復された。

◎私たちの結婚の二日後（昭和 29 年ころ）、相愛の若い二人が隔地心中する事件があった。「この世で 結ばれないなら あの世で 結ばれます 死に場所が 違ってても 行くところは 一つです」二人は別々の場所で青酸カリをあおった。「自分の家が 狐持ちと みなされる」それを恐れ、二人の最後の願いもかなえられず、別々に葬られた。戦後、松江法務局に正式に報告されたこの種の事件は 46 件ある。

◎子供時代に「狐の子」といわれ、聞かされた話。「坊ちゃん 知らなくてもいいことを聞いたね」「狐持ちとは狐をたくさん飼っていて 狐たちが啜えてきたお金で 金持ちになった家のことを言うんだよ」毎年、小作人が米俵を運んできた、小作人が自分たちで作った米俵を年貢として納めに来た。

◎柳田國男先生と出会った。「出雲の しかも狐憑きの家 ぜひ 俗信を研究してください」といわれた。

◎患者は、恐ろしい事件や、治りにくい難病にかかり、てっきり狐が憑いたと自己催眠にかかる。狂乱の舞踏、意識を失い狐になりきった言動をおこなう。油あげや小豆飯を欲しがり、わめきたてる憑依現象が続く。その後祈禱師の荒々しい加持祈禱や、医師の電気ショックで自意識を取り戻しけろりと治る。昔は超能力の保持者、神職、僧侶、山伏、巫女などの呪術家の加持祈禱に頼っていた。同じような話は、古代エジプト、EU、アジア各地に盛んにあった。

◎昭和 26~31 年の間に、鳥取大学付属病院を訪れた狐憑き患者は年平均 4 人ぐらい。その数倍の患者が小さい医院や祈禱師の手にゆだねられていた。

◎狐持ちとは、縁組、田畑の売買、賃貸借も行われず、村八分状態であった。出雲、伯耆、隠岐の村々では今も、人々の間で、「狐持ち」と指さし、ささやかれている。

犬神（イヌガミ）：犬神は狐（人狐）とともに憑きものの横綱で、中国、四国、九州地方にある。なんととっても高知県中村市（現四万十市）が本場である。今日でも犬神統に対する結婚差別は相当ひどい。このあたりの犬神統の歴史は古く、近世初頭に文献に載っている。階層的にも貧しく、13 世紀の一条家、長宗我部家、山内家と支配者が変わる度に、名主の奴隷や、武士から格下げされた農民が送りこまれた。

◎犬神下知状 1472 年：阿波の守護細川氏が、領内一円の犬神使いの弾圧を命じている。

◎1660 年代：「土佐国畑（幡多）というところに、其土民数代伝わりて狗神という者を持ちたり」「他人の小袖財宝道具すべて何にても」犬神持ちが欲しいと思うとき、犬神を他人にとり憑かせ心身悩乱にさせ、あるいは死に至らしめるといふ共同幻想ができあがっていった。「外寒・風邪・瘴気の熱はなはだしく、心身苦しきときは、例の犬神よと、病人も病家もおもう故に」そこで「山伏のようもの数々迎えて」加持祈禱させた。

◎京の都の犬神人：京都の祇園社をはじめいくつかの神社に神人（じにん）が付属していた。祇園社等に隷属し、清掃、警護、神輿（みこし）かつぎなどの賦役を負担する一方、弓・弦の製造販売をしていた。弦売僧とも呼ばれ、やがて市中の清掃、葬儀権を掌握し、多宗派襲撃の手先を務めるようになった。石清水八幡宮の犬神人（大山崎犬神人が隷属していた）は油の製造販売の特権を持ち商人化していき、瀬戸内一円にも油の販路が拡大していった。

◎外国の憑き物：憑霊現象は古代ギリシャや中世 EU、アジア、アフリカにもみられる。

◎古代ギリシャでは癲癇は神聖な病氣、精霊によっておこると信じられていた。

◎中世 EU では、悪魔憑きが横行し、教会が悪魔祓いをおこなった。

◎ジャワでは、トラの霊に憑かれるとトラのような狂乱状態に、ワニに憑かれるとワニのように這い回る。池に住む「白い霊」「黒い霊」は人に憑いて、病氣、狂氣、死をもたらすのでインドネシア人は怖れる。

◎アフリカ：ソマリ族はいろいろな霊に憑かれ、癲癇、失神、昏倒、嘔吐、衰弱、憂鬱、痛みなどがあらわれる。青年がふり捨てた娘に憑かれたり、娘が結ばれなかった青年に憑かれたりする。暗いところに潜んでいる悪霊が綺麗な衣服や贅沢な食物を欲しがり、それを持っている人に憑く。治すには性的内容の歌を歌い踊る。

民衆史の遺産：憑きもの：本の中に、石塚尊俊著<全国憑きもの報告集成>という項があり、北から南までいろいろな事例を載せている。解説には、「柳田國男の指導のもと・・・云々」と書かれている。

その中に燧ヶ岳（ひうち）という名前を見つけた。昔、澤山さんより馴染み無い漢字が並ぶ山の連絡を受けた。「燧ヶ岳を登り 桧枝岐村で泊まる・・・」「なんだこれは」と困った思い出がある。十年以上も前のこと、澤山・山下・岡村の三人で東北を訪れた。澤山車で新潟の柏崎あたりまで北陸自動車道、その後、内陸を目差し、どこかの駅で列車の山下さんと合流したが、駅の名前、泊まった場所、登った山、いろいろな駅名、地名が思い出せない。地図を見ると、桧枝岐村（ひのえまた）ああここでは一泊した、歌舞伎の舞台があった。「渡部恒三」代議士のポスターがやたら見についたが名前を忘れ・・・と調べたら写真を見つけ名前が載っていた。尾瀬の湿原はみなさんが賞嘆するように素晴らしいところだった、「夏が来れば 思い出す」という歌が流れる石碑装置があった、この歌には感動した。食べ物、言っては失礼だがまずかった、コメか麦の練ったものの汁、これが美味いと言われ、もちろん食ったが、美味いとは思わなかった。山は燧ヶ岳ともうひとつ登った。会津駒ヶ岳の日は雨で中止、帰りの澤山家の墓参りを付き合ったが、今、本人がそこにいるとか。

◎イタチよせ（戦後すぐの文章）「南会津の民俗：桧枝岐民俗誌」

狩りと祭り、イタチよせの二つだけは、いかなるブッコリ（無信神もの）でも信じるほど、神秘的なものだと言われている。

これは、病人が回復するか否かとか、天候や作物の豊凶や、その他必要とされるあらゆることのト占のために、動物のイタチの霊力を借りる方法なのである。

鎮守様の前に燧ヶ岳の神様（祭場）を臨時にしつらえる。ここがイタチよせの場所である。まず中央に、「ヨリ（イタチの神霊が乗り移るべき者）」を座らせておく。ヨリに指名された者は、両手に幣束をもって、その手を膝の上に乗せて座る。このヨリの周囲を5人10人の人々が囲んで立ったまま、イタチの神を拝んでいる。そしてイタチを寄せる人は次の呪文を唱える。

「だいけんにっそん目のう神 だいじょうがっそん月のう神 しんとうかじ」

さらに印を結びながら、次のごとく唱える。

「玉のごとく 鏡のごとく 剣のごとく 清く美しく・・・」

こう唱えていると、やがて、ヨリの手が少しずつ震えてくる。そしてさらに、その両手がはげしくぶつつけ合ったり、座ったままで飛び上がったたりするなど、完全な神ががり状態に陥ってヨリになった本人では、とうていわからぬことを、まったく知るはずがないことを告げる。すなわち宣託をするのであった。

このイタチ寄せ神託ト占法は、今から百年ほど前までは、川内の法印が来て行い、その後、法印が来なくなってからは、村人の中でそれをやる人がいたが、燧ヶ岳に参詣して信心をこめてやっても行が足りなくてなかなかイタチが憑かなくなり、最近次第にすたれてしまった。

このイタチ寄せに参加するものは男性に限られ、女性は一人も加わらなかった。ヨリになるものは年齢には何ら関係はないが、イタチの憑く人と憑かぬ人とがあったという。かくて宣託が終わった後は、再び前の呪文を唱えて、ヨリに憑いたイタチの霊に立ち去ってもらい、ヨリは再び常態に戻るのである。

二三十年ほど前まで、村の若者たちが夕方などに集まった折に、面白半分にイタチ寄せをしていた。二里も三里も離れたところのイタチが寄ってくるという。まずヨリニンを定め、これを中心にして、その周囲を囲み、皆で揃って、「オンショウショウ ソワカ オンキリカクヤ ソワカ」と繰り返して唱えるうちにイタチが寄ってくる。ヨリニンは膝の上に両肘をつき、しゃがんだまま跳びまわりだす。するとまわりの人たちとの間に、「どこから来たイタチだ」「何々の沢から来た」などという問答が始まる。イタチを寄せるのは易く、離すのは難しいそうで、それを離す唱詞があると云い、またイタチの憑いた人をそのままほっておけば、草臥れた様子に座り込み、あるいは倒れて、暫くすれば自然にイタチはのくという。

◎比良に登ろうとしている、毎度おなじみ北小松駅から比良駅までのコース。9時北小松駅を出発。同道は先日の展覧会でお会いした番匠さん、同じ年ながらいまだにフルマラソンに出場して4時間ちょっとで走るという体力の持ち主、しかも展覧会の場で共通の知人が何人かいるという奇遇の人である。

◎1時間で涼峠にやってきた、まず一本目はフウフウである。水とおにぎり。マラソン氏足どりは軽やかである。

◎2時間登ってきた、琵琶湖がすぐそこに見える、風が吹いている、風が冷たい、下界は桜というのに冷たい風だ。昨日の夜、大阪で多少風が吹いていた、その風のなごりかね。ヤッケを着こみフードをかぶった。所々に雪が残っている、まさか上はもっと寒いということはないだろうね。

◎11:45 ヤケオ山に到着、なかなかハイペース、10年前は、「3時間で 釈迦岳を通過していたが」とまたもや昔話。相変わらず冷たい風が吹く、「まさか この暖かさ 毛糸の帽子は いらないだろう 冬用手袋は いらないだろう 雪も少ないので スパッツもいらないだろう」この判断は最終的にはよかったが、ここを歩いている時はせめて毛糸の帽子はと思った。マラソン氏、「野球帽が 飛んだ」という、オレにとって、走り屋さんと同様なのは初めてのこと。「もう 歳なので ならかな山 土の所は走るが 岩の所は慎重に とくに下りは慎重に ゆっくり でないと ひざにくる」とおっしゃる。荷はごく小さいザック、山用ランニングシューズ、タイツに半ズボン、薄い上着、あの格好で雪が残るこの山は寒いかも知れない。

◎ぐるり見渡せる。武奈ヶ岳の上は白い雪がべったり残っているようだ。反射板が見える山は蛇谷ヶ岳、雪はまだら模様に残っている。下の村の田んぼはまだ水が入っていない、雪が融け枯れ草色の四角が並ぶ。登ってきた道、これから登ろうとする道が見える。琵琶湖の水は黒く鮮やかに、島が見える、船が見える、湖東湖北の山々がややかすんで見える。

◎ヤケオ山を少し来たところの左側に池がある、「え 池 こんな池は見たことがない」と驚いた。今まで見過ごしていたのか、まだら雪が残る窪地にたまたま雪解け水が溜まったのか、「行ってみよう」と見に行った。10センチ 30センチの深さ、透明な水の中、上から見るだけでは虫も何もいなかった。そのまま歩きだした太い道、進むとどうも様子が違う、「間違えた これは 旧道 かもしれない 上だ」と急な斜面を少しよじ登り尾根にある登山道を見つけた。ピンクの花、白い花、を見つけたが名前はわからない、武骨な山肌にポツリ咲いている。ネットで調べるには、「イワカガミ」「イワウメ」などと載っているが名前の自信はない。

◎釈迦岳までもう少しというところまでやってきた、ヤケオ山から見ると、「まだまだ遠いぞ」と思えるが、山は上の方には尾根道のポコリンポコリンは案外近い、「すぐじゃねえぞう」怒られそうだが・・・

◎釈迦岳で飯を食った。いつものおにぎり野菜炒め。おやつ類はいっさい持ってこなかった、饅頭やらチョコレートやら果物、あれば旨かろうと思うだけである。

◎石英斑岩:「ほれ これ 石英ハンガン 板の岩と書く」白い石のかけら、石のことには無知なオレ、比良山は花崗岩の山でかつて、石切り場があった、金糞峠があるように鉄を作っていた、それぐらいしか知らない、ネットで調べてみた。石英の透明なものは水晶らしい。砂漠の砂も石英が中心らしい。石英は硬い、宝石はより硬い。アメジストは紫水晶。板岩については疑問符が残るが、なにぶん未知の世界でわからない。

◎雪は所々に残っているが、硬くて潜らない、スパッツを付けていなくても雪が靴に入っこないが、軽登山靴は雪解け水でジワリ濡れてきた。「もうこの歳 次の靴は要らない」と思いつつつもカタログは見ている。

◎2時前北比良峠にやってきた。真下に琵琶湖が見える、黒いブルー、あの色は何て表現したらいいのだろう、「絵にも描けない美しさ」とふざけて言うが、黒っぽいブルーは汚く見えるのが普通だけれど、しっとり重くそして軽く湖面を覆っている。武奈ヶ岳は雪が覆っている、元スキー場も雪がちらほら、ここにリフトの駅があったころにはこの松も青々していたような気がするが、ここ数年枯れてしまって幹だけが残っている。ヤッケは着込んだままだが、風が弱くなり、お陽さんも照り、爽やかである。

◎4時前にイン谷口まで下ってきた。ビールで乾杯、ウイスキーを川の水で割り、乾きものを、コンロを出してラーメンを食べ、8時ころ、家にたどり着いた。

展覧会が終わって半月たった今日、初めて新しい絵に挑戦し始めた。20号を組み合わせた40号、それと10号、6号、3号らの4点のキャンバスを床に広げ色を入れた。ウルトラマリンの絵の具、チューブを絞り、金属のお椀に入れる。余計な話だけれど、絵具をいれる金属のお椀、この話を先に聞いてください。これは、粉もん文化の大阪人ならよく知っている、お好み焼きの椀である。カミサンの先代が、かつていちびり自宅にお好み焼きのセットを購入した。重たい鉄板が付いたお好み焼き店にでもありそうな立派なやつ、鉄板の下には都市ガス用バーナーが付き、今でも十分に作動する。大小いくつかの金属のコテ、これはお好み焼きをひっくり返す、お好み焼きを細かく切って口に入れる、無くてはならない道具だ。材料を混ぜる金属の椀、メリケン粉を練ったものにキャベツやら紅ショウガやらを入れ箸でかき混ぜるための椀だ。これらがいまだに我が家に残っている。我が家でも、いちびりお好み焼きを焼くことがあるが、材料を混ぜる時は大きいボールを使うようになったので、この椀は使わない。というわけでオレの絵の具の横にはこの金属の椀が4個重なっている、絵の具を溶くのに最適である。椀には取っ手がついていたが力任せに外してしまった。

仕様もないことをくどくど述べましたが、絵具の次にジェルを入れ、太い刷毛でかき混ぜて溶き、白いキャンバスに押し付けた。白いキャンバスに色が入る、この瞬間が非常に気持ちがいい、ただの白いキャンバスが絵になる瞬間、これがオレの脳に伝わってくる、「絵が描ける 絵を描いている」という喜びが身体に伝わり、オレ自身を嬉しくさせてくれる。下卑たるいい方になるが、とにかくこの最初の一発が最高である。口の悪い身内に言わせると、「せっかくのきれいなキャンバス 真っ白で汚れていない それを汚してしまうなんて・・・」「がはは本当だね 真っ白なら 人にも譲れるが 汚すと だれも嫌がるよね」などと丁々発止の悪態が飛び交う。また話はそれだが、いつもこの一色を入れて絵具が乾くのを待つ、今は待っている時なのである。嬉しい、気持ちがいいという余韻を感じつつ待っているのである。

筆も若いころからいろいろ使ってきた、ほとんどは画材屋で買っていたが、ペンキの刷毛専門店で勤めていたS・シューチャンからいくつかの刷毛をもらって描いてみるとこれがオレの手にぴったり馴染んだ。それ以来、ここぞという色を入れる時は太い刷毛を使用している。我がアトリエに絵を描きに来ておられる方は、「一本一万円ですよ」というようなすごい筆を何本も持っておられる。「筆とは高いものですねえ」と感心しているが、キャンバスにこすりつける、ぼたぼた垂らす、こういう作業には太い刷毛がいいのである。太めの油画用豚毛の筆、これもいい、毛が擦り切れ、硬くなり、棒の先にちょっと毛が残っている状態の筆やら、これもいい。

3月の展覧会が近づいた一ヶ月二ヶ月ぐらい前に、今回の出品作品は、「これと これと これ」と簡単に決まってしまったが、この、「これ」にはずれてしまった駄作の山を修繕し始めた。この修繕という作業が楽しい、展覧会前の1ヶ月、終わってからの半月を修繕に費やした。二三年前は水彩画の山を半年ぐらいかけて修繕した。十年ぐらい前は、タブローを引っ張り出しては手を入れた。この、タブローを引っ張り出しての作業は、「しなければよかった あの時の新鮮さを消してしまった 失敗だった」といまだに後悔している。修繕は、「描き直そう、どんどん手を入れよう」というのはよくない。「この絵はよくないが ワンポイント ツウポイント 色を線を それで終わる 絵が生きかえる」という考え方で進めた。手を入れすぎて失敗してしまったというやつもいくつかあるが、「絵が落ち着いた これならよし」というふうになったやつもあると信じている。

絵を描く手順を綴りながら、この作業とは何に似ているのかと思案してみる。

◎料理だと時間との勝負、材料の準備、材料の下処理、なんて作業はあるが、最後はほとんどが火を使い、短時間で仕上げていく、ちょっとこれではないよね。

◎農作業は、大工仕事は、模型作りは・・・、こんなくだらないことは考えないようにしよう。

佐伯順子著<「愛」と「性」の文化史>

書架に在るこの本を手に取り、「スケベな 思いに反して 硬い本だろうな」と借りてみた。“はじめに”で、愛や性をめぐる様々な現象は、古今東西、人間の大きな関心となってきた。文学も映画も演劇も、テレビ・ドラマも歌も絵画も、愛と性のモチーフを抜きにしては多くが成り立たないだろう。だが、恋や性をめぐる感受性や価値観は、決してひとつではない。

春画の話は江戸時代の木版画のことだろうと想像されるが、その画像はこの本には載っていない。無修正の木版春画の印刷物は何度か見たことがある。着物を着た男女が絡み合っている、男根と女陰は顔に近いぐらいの大きさで、髪から毛まで丁寧に描かれている。ポルノグラフィーを見るようなつもりで眺めていたが、先生の解説でなるほどとわかった部分があった。木版画といえば、三十六景に代表される風景画、美人画、役者絵、そんな諸々が駆け巡る。春画もそれらの中のひとつだと思っている。

文学において、江戸期も、明治になってからも、あからさまな性の描写はなく、男女の交接・交合の部分はさらりと流してあるとおっしゃる。蛇足だけれど、オレは中上健次著<重力の都> これを読んだときに、男女の交接・交合の部分の息遣い、肌ざわりの感触、四肢の痙攣が如実に伝わってきたと絶賛している。

処女だの貞操だのという倫理感の高まりは明治以降のものだそうで、昔の日本人、そしてこれからの日本人は、おおらかな愛やら性やらを享受していくのだろう。明治の与謝野晶子が「結婚前の女性がみだりに男性と接することを厳しく戒めている」そんな明治時代の風習の名残なのか、オレの育った時代も明治時代ほどではないにしろ、なかなかうるさかった。

◎春画という単語自体、江戸時代には存在しておらず、当時は「笑い絵」と呼ばれていた。「まじない・習俗的なもの・性教育的なもの、エロティック・アート、ポルノグラフィー、性的な笑いや遊びを楽しむもの」春画の主題は、「お笑い」ではなく、あくまでも、「交合」である。

◎柳田国男<笑の本願>「神がこの世の中で何者よりはるかに怖ろしく、如何なる場合にもこれを敵としては、寸時も安堵に在り得ないことを信じてから、人は甘んじて神の笑いを受け、次にわざわざ笑われるような行為をして、且つはご機嫌を取り結び、且つは自分たちを笑われても一言もなき者共なることを承認しようとした」神の怒りを鎮め、祝福を受けるために、人間の宗教儀礼として、神に笑われるような行為をしたと論じている。

◎笑いを招く芸能の狂言や田楽があり。「神がかりして、胸乳かきいで裳緒（もひも）を番登（ホト）に忍し垂れき」アメノウズメがアマテラスオオミカミを天岩戸から呼び出すために、桶を踏み鳴らし、背をそり、乳房をあらわに、スカートの紐をほどき、女陰を見せ、力強く恍惚の声を叫び踊った。それを見て八百万の神々が、高天原に鳴り響くほどに笑った。

◎折口信夫：日本文学にはエロチックな笑いの要素があり、日本の芸能にも、「人を笑わせ 神を喜ばすわざがある」笑は歌垣や男女相聞の歌のように掛け合いを通じて発達した。

◎神がかり的陶酔・笑い・エロティシズム<日本の芸能、本質的三要素>

◎「交接芸能」男女の交合を演じつつ笑いを誘う。「万物の生成を太陽神と地母神の性行為のみのりと考え 性器を生命力と豊穡の根源とみる農耕民族共通の信仰」

◎春画が描く生殖器、女性男性ともに誇張された大きさをもっている。豊穡に結びつくともなされる出産を実践するのは男根ではなく女性生殖器の方なのである。

◎原則として、出産は禁じられ、もっぱら交合から快樂のみを抽出する遊女の身体では、豊穡祈願のパワーは期待できない。一般女性（当時は地女）で、しかも、文句なしに出産できる夫婦間の交合が豊穡祈願の理想となる。

◎江戸時代の地女と遊女を比べた場合、春画においてエロチックな存在は地女であった。処女や貞操といった倫理観が地女を束縛していったのは、明治以降である。

◎江戸の遊女、夜鷹のような街娼は別にして、床上手が名妓の条件の一つだが、歌舞音曲、茶の湯、会話の妙といった交合以外の人間関係も大事にされていた。

佐伯順子著<「愛」と「性」の文化史>

この本、春画の話のあとに、後半に心中の話が出てくる。先日も、「憑き物」の項で、「この世で添い遂げられないのなら あの世で ふたりは結ばれよう」と死んでいったと報道されたふたりの話が載っていた。心中という報道は今でもどこでも聞かれる。いろいろな悩みや困惑で亡くなっていった人たちもたくさんおられるが、この本の主題は「愛」と「性」ということで、ほとんどの方が一人か二人で亡くなっている。死んでいくのは、二人の愛が成就したにせよ、しなかったにせよ、社会が世間が許してくれなかった、ということなのかねえ。

◎古事記：軽太郎女（カルノオオイラツメ）軽太子（カルノヒツギノミコ）ふたりは異母兄弟であり禁忌の中であつた。二人の恋の歌は、死の悲しみや苦しみよりも、禁忌を犯すことでいや増す官能の遊びがあふれている。

◎あしひきの 山田を作り 山高み 下びをわたせ 下どひに とがとふ妹を 下泣きに 我が泣く妻を

こぞこそは 安く肌ふれ

◎笹葉に うつやあられ たしだし い寝てむ後は 人はかゆとも うるわしと さ寝しさ寝てば

かりこもの 乱れば乱れ さ寝しさ寝てば

◎平通盛と小宰相（こざいしょう）一の谷の合戦で亡くなった通盛のあとを追ひ、身重の妻、小宰相も入水する。母親として生きていくという選択を捨て、夫への恋を優先して死を選ぶ。死をもって恋を貫徹する激しい自己主張は、エロスとタナトスの融合という、彼女の死の神話的性格を伝える。

◎エロスとタナトス：生きる情動と死の衝動。フロイトが提唱した概念。エロスはポジティブな前向きに生きていこうとするエネルギー（性も）。タナトスはネガティブな、破壊や死に向かって進むエネルギー。人は常に前向きに進みたいのかもしれないが、時には、下を向き、沈み込むときもある。そんな心の振れがある。

◎謡曲<女郎花>夫の足が遠のいたことを恨んだ妻は、川に身を投げて死ぬ。夫は、妻を死に追いやったことを悔やんで、川に身を投げる。

◎尾崎紅葉<二人比丘尼色懺悔>二人の女性と関わったことのお詫びの意味を込め自害する主人公。尾崎紅葉もこの本も読んだことがなかった。ネットであらすじを垣間見た。

◎元禄時代末期には心中が流行した。その相手には遊女が多かった。遊女との恋には経済的トラブルや身分の差、男性側が既婚者といった現実的障害が伴いがちだった。近松門左衛門<曾根崎心中><心中天網島>

◎曾根崎心中のお初の台詞：逢ふに逢はれぬその時は、この世ばかりの約束か、そうした例（ためし）のないではなし、死ぬるを高の死出の山、三途の川は、堰（せ）く人も、堰かるる人も、あるまい

◎謡曲<松虫>男の男への後追い心中。「死なば一所とこそ契りしに」仲の良い男友達二人が阿倍野の原を連れ立って歩いていると、松虫の音が美しく響く。その音を慕って一人が草原に分け入り倒れて亡くなってしまふ。残された友はそれを嘆き、付近の池に身を投げて後を追う。

◎日本の中世では、男色文学がしばしば描かれている。特に武家の男色の逸話には、主君の死に際して切腹する追腹（おいばら）は武士的な死の潔さと、一人の相手への恋心を死をもって貫くという美学が融合した。

◎謡曲の<高砂>結婚式で歌われるとは知っていたが内容は知らなかった。「不思議や見れば老人の夫婦一所にありながら、遠き住吉高砂の浦山国を隔てて住むと云ふは如何なることやらん」：夫婦というが、どうして遠い高砂と住吉に離れ離れに住んでいるのか。「うたての仰せ候や。山川万里を隔つれども、互に通う心遣いの、妹背の道は遠からず。年久しくも住吉より、通い馴れたる尉と姥は、松もろともにこの年まで 相生の夫婦となるものを」くだらない質問だね、距離が離れていても、お互いの心は通っている。松の緑と同じようにいつまでも変わらぬ仲睦まじい夫婦なんだよ。

◎谷崎潤一郎<瘋癲老人日記>生きていく限りは、異性に惹かれずにはいられない。この気持ちは死の瞬間まで続くと思ふ。すでにまったく無能力者であるが、だからとっていろいろの変形的間接的方法で性の魅力を感じることができる。現在の予はそういう性欲的楽しみと食欲の楽しみとで生きているようなものだ。

吉谷が亡くなったのはいつかと調べる、2015年7月となっている。68歳だった。彼の奥さん、いくちゃんが、「荷物の整理をしているが テップさんの陶器 いらない？ それと 吉谷の落書きがある 見たくない」といわれ取に行った。落書きは、一二枚のものかと思ったら、菓子箱いっぱいにあった。漫画家のテップさんの陶器とメモいくつかを持ち帰った。「テップさんの陶器 よくないねえ オレの あげた皿の方が 光っているね」

吉谷の文章、二十歳ぐらいに書いたメモがいまだに記憶に、印象に残っている。「交差点で 野良犬が 大見得を切っている」半世紀経った今でも覚えている、いい文章だと思っている。また「檻樓」という漢字の単語も教えてくれた。彼のメモ、いくつかを拾い読みした。文章は漢字とカタカナで成り立っている。書き起こしながら、「吉谷 おまえ これは 文学少年がすきそうな 単語の 羅列だけじゃ ないのかな」と悪態を付きたくなる。多分酒をちびちび飲みながら、鉛筆で殴り書きした文章なれど、面白いものをオレなりに羅列します。

◎メダカノコ 老眼鏡ニ 虫メガネ ソレデモ トドカン 遠く 記憶カ

◎背伸ビシテ 肩甲骨ヲ 閉ジテミル 昔 飛ンデタ 羽ノ跡 羽ノ記憶 肩甲骨 納メル

◎本日 生マレタデアロウ メダカノコ ソレハ記憶ヲシゲキスル 私モソノヨウニ 動イタ 記憶ガアル

◎死シテ 全テヲ 棄テル 決意

◎私 ハモウスグ 眠ルダロウ 一度モ 目ヲ サマサズニ 名前モ ヨバヌママ

◎白紙ニ チビタ 鉛筆ノ 秋

◎スベテガ サビテイル スベテガ カレテイル ソコニハ 誰カガ 居タ

◎タブン 古イ 鏡ニハ 君ノ先ノコト 新シイ 鏡ニハ 昔ノコト イッパイ

◎ヤハリ サビシイデス コノヘヤノ サブクテ

◎なれんものを もとめ そえんものを おう それ おのこよ

◎一合ヲ 三日ニワケテ 生キテイル 百円ノ ノリ 六日ニワケ カツヲブシヲ 百五十回ケズツテ 生キテイル 百円ノ シャケ六日ニ ワケ トウフヲ 二日ニ ワケテ ナットウヲ 三日ニ ワケテ 週ニ 一度 洗濯ヲシテ 生キテイル 日メクリヲ メクル 為ダケニ 生キテイル

◎二日酔イ 三日 続カズ 二日酔イ

◎終着駅が好きだった それはなにか建てつけの悪い駅の形 いかにも半分田舎 都会のサラリーマンのベッドタウンの中を走る電車に似つかわしい容貌の悪さと粗野をもった小さな終点だった そして その駅はターミナルから離れぼつねんと中途な所で「あの立派な建築」でない木造の全貌を道路から少し高い所に持っていた

◎もう自分は人がどれほど自分を醜いものとしてとりあつかっているのかが解ったような気がする。人も目をいくつか捜しだしていたが、その目は見つからなかった。なにひとつ確かなものは得られず、逃げ出すことをさえ許されていないんだ。それはいっそう慌てなければならなくなった。なんという焦燥だろう。はじめ自分はホームの階段近くの隅にいたが、落ち着かなく中途まで行き、立ち竦んでしまった。「先まで行ってしまうと 自分はもう引返してくるしかない それは出来ない 電車がこれ以上こなければ もうこの先歩けないと解っている所で 居なければならぬ」それは誰の気にも止まらぬよう秘める罪人にも似た想いだ。「確かにそうだ」自分は古い罪人であったことを思い出した。それはふつつ自分の内で、一番真面目なものと信じているものが、この世で、社会でのもっとも不真面目なものに変わる時だ。そしてその時、自分は不真面目という表情をきざんだ罪人になるのだ。その時自分は一つの腐敗物となり、自分の内臓に虫が動くのを見、冷酷の権威の権化となり、自分を滅ぼさねばならぬ劣等人種であることを知る。もうその夢見るものは、ありとあらゆる全ての腐敗であり、すべての憎しみと狡猾と略奪であり、それが感じさせるのは、突き上げる糞尿からの吐き気であり、人類を滅ぼさぬ為には、俺を静かな一人にしてくれ、という叫びだ。